

自撮りヒューマンドキュメンタリ

山岡和純：第3部：思えば遠くへ来たもんだ、この先どこまで行くのやら

小生の自撮りヒューマンドキュメンタリは、SRID ジャーナル第20号から足かけ1年間の連載をお許しいただきました。今年62歳を迎えました筆者が今、人生という山の何合目を歩むのかは神のみぞ知るところですが、本稿にて一旦完結とさせていただきます。

第1部では青少年時代と、農林水産省本省を中心に身を粉にして奮闘した17年間の、そして第2部では、足を滑らせ道を外した私が迷走した第二の人生をご紹介いたしました。振り返ればこの迷走こそが人生の面白さであり、「自撮り」を書き残したい一念を惹起した魔法の媚薬なのかも知れません。第2部の最後に吐露した、過去の足跡を記憶から消し去り世捨て人に近かった冬の40代後半、そして、JIRCASで国際研究のフィールドに出たりハビリの10年間は、本当ならば封印したいような迷走時代の記憶なのに不思議なものです。

第3部では、50代を過ぎたJIRCAS時代の新たな出会い、SRID、「国際協力論」講義、SALIBU 再生稲栽培法との数奇な巡り合わせ、テニスへの傾倒、そして番外で「私の健康とスポーツ歴」を書き残したいと思います。3部編を通した全体の目次は以下の通りです。

【第1部－文理両刀使い仕事人の誕生－30代まで】

子供時代 1959-1972

学生時代 1972-1982

社会人1年生－農林水産省本省 1982

地方の現場で－農林水産省東海農政局 1982-1987

再び農林水産省本省（構造改善局）1987-1989

農政の中核で－農林水産省本省（大臣官房企画室）1989-1990

海外赴任までの繋ぎ－農林水産省本省（再び構造改善局）1990-1991

在オランダ日本国大使館時代 1991-1994

国際派の一員へ－再び農林水産省本省（経済局）1994-1996

ミスター中山間と呼ばれる－農林水産省本省（再び構造改善局、開発課）1996-1997

棚田との出会い－農林水産省本省（開発課－続編）1997-1998

公共事業の経済評価－農林水産省本省（事業計画課）1998-1999

【第2部：行政官から教育・研究者へ】

地方自治の現場で－山口県農林部 1999-2001

世界水フォーラム－(財)日本農業土木総合研究所 (JIID) 2001-2003

流罪遠島を命ず－(独)農村工学研究所 2003-2006

教育者として－東京大学大学院農学生命科学研究科 2007-2010

研究者として－(独)国際農林水産業研究センター (JIRCAS) 2010-2020

- ① JIRCASでの業務の概観
- ② 最初の出張はアフリカ3か国
- ③ 国際かんがい排水委員会 (ICID)
- ④ 世界水会議 (WWC)

【第3部：思えば遠くへ来たもんだ、この先どこまで行くのやら】

- ⑤ JIRCAS時代の著述
- ⑥ SRID (国際開発研究者協会) と共に
- ⑦ 東洋大学国際学部「国際協力論」非常勤講師
- ⑧ SALIBU 農法との出会い
- ⑨ SALIBU 再生稲栽培法の研究
- ⑩ ガーナでのFBO研究

最後に－番外編－私の健康とスポーツ歴

⑤ JIRCAS 時代の著述



JIRCAS には 2010 年 4 月から、研究者として 10 年間勤務いたしました。年間 6~7 回の海外出張で飛び回る傍ら、研究者ですから物を書くのが仕事です。著述に費やす時間は十分にありましたので、前職の東京大学特任教授時代、その前の農村工学研究所研究室長時代と同様に、和文英文織り交ぜて多彩な著述に励みました。前半の 5 年間は主に国際会議での発表とインドネシアでの現地調査が題材となりますが、国際会議と申しましても、前職までの時代に味わった利害対立が際立ち緊張感高まる丁々発止とは縁遠い、リラックスした国際会議です。後半の 5 年間はミャンマーとガーナでの SALIBU 再生稲（ヒコバエ）研究の研究論文が主体となります。これらに加えて、ジュニア地球白書、地球環境データブックなどの書籍も著したほか、様々な国際水議論に関する持論や書評を含む幅広いジャンルの著述に取り組み、JIRCAS が発行する Newsletter にも頻繁に寄稿しました。

「自撮り」の第 1 部と第 2 部では 2009 年までの著述を振り返り文献リストをお示ししましたので、ここではそれ以降、私が JIRCAS 時代に上梓した論文、記事等の著述を一通りご紹介させていただきます。ただし、SRID 関係と SALIBU 関係の執筆活動につきましては、後ほどのそれぞれの項目の記述のところでご紹介いたします。JIRCAS に着任した最初の年 2010 年は、行政への復帰の目が断たれたショックからの立ち直りと、国際研究という新しい職場環境へのアジャストに時間を要しました。このため著述は、10 月にインドネシア・ジョグジャカルタで開催された ICID（国際かんがい排水委員会）の TF-FIN（農業用水の資金調達作業部会）に提出、発表した英文ペーパー 1 編のみでした（2010 Yamaoka）。

翌 2011 年には、農業農村工学会誌「水土の知」に「大学生による小学生への環境教育」というテーマで報文を投稿したほか（2011 岡島他）、ワールドウォッチジャパンからの依頼を受け、ジュニア地球白書という書籍の一部を「気候変動が農業と食料へ及ぼす影響」という内容で分担執筆しました（2011a 山岡）。また、愛知県立大学からの依頼を受け、同大学地域連携センター年報に「世界に発信：水土里の共生社会基盤」を（2011b 山岡）、さらに、棚田学会誌に「圃場整備の効果」を寄稿しました（2011c 山岡）（他に SRID 及び SALIBU 関係で 2 編（2011d 山岡、2011 Yamaoka, et.al））。

2012 年には、JIRCAS への転任後に頻繁に訪れることになったアフリカ諸国での知見を活かし、「サブサハラ・アフリカ稲作水管理研究の意義および現状と課題」と題する報文を農業農村工学会誌に寄稿しました（2012a 山岡）。また、環境技術誌に「参加型灌漑開発管理の成果と課題～水問題解決への重点課題」（2012b 山岡）、さらに、ワールドウォッチジャパンからの依頼を受け、地球環境データブックという書籍の主要な著述部分として「フード & ウォーターセキュリティー未来世代を養う食料と水の展望」を小山修氏との共著で書き下ろしています（2012 山岡他）。また、2010 年に ICID の TF-FIN に提出していた英文ペーパーを増補して再提出しました（2012b Yamaoka）。このほか、報告書 1 編と JIRCAS Newsletter などに 3 編を著しています（2012d 山岡、2012e 山岡、2012f 山岡、2012a Yamaoka）（他に SRID 関係 1 編（2012c 山岡））。

2013年には、世界農業遺産に指定された佐渡及び能登地区に関する論文を棚田学会誌に寄稿し(2013b 山岡)、インドネシア・ジャカルタで開催された国際セミナーでの基調講演ペーパーを提出しました(2013a Yamaoka)。また、山梨県富士吉田市で開催された国際commons学会にも英文ペーパーを提出したほか(2013b Yamaoka)、トルコ共和国マルディン市で開催されたICIDの第1回世界灌漑フォーラム(WIF1)では「世界の灌漑農業開発が有する傾向と持続可能な投資への課題」と題する論文を提出し発表を行いました(2013c Yamaoka)。さらに、全国棚田連絡協議会の機関紙「ライステラス」に世界農業遺産に関する論説を寄稿し(2013c 山岡)、また、日本ICID協会会報の巻頭言を飾らせていただきました(2013d 山岡)。このほか、JIRCAS Newsletterなどに4編を著しています(2013e 山岡、2013f 山岡、2013d Yamaoka、2013e Yamaoka)(他にSRID関係1編(2013a 山岡))。

2014年はJIRCASでの10年間の前半最後の年でしたが、和英のペーパーを量産した前年の反動で限られた著述となりました。2011年度からスタートした科学技術振興機構(JST)の「農業水利サービスの定量的評価と需要主導型提供手法の開発」という研究開発プロジェクトの研究開発終了報告書(2014a 山岡)、ICIDのニューズレターに寄稿した「世界水遺産」プログラムに関する記事(2014a Yamaoka)、並びにJIRCASが主催したシンポジウムでのパネルディスカッションの結果をJIRCAS Newsletterなどで紹介した記事の計4編です(2014b 山岡、2014b Yamaoka)。

2015年以降は、JIRCASで研究者として過ごした10年間の後半となります。後で述べますように、2014年の初めにインドネシアのスマトラ島でSALIBU再生稲(ヒコバエ)栽培法に偶然出会い、2016年からこの栽培法に関する研究をミャンマーとガーナで開始し、2020年3月にJIRCASを定年退職します。この間、あっという間の4年間でしたが、大変充実した研究生活を送らせて頂きました。第2部でも述べました通り、現地調査研究のため、50歳代後半の5年間は年間平均10か国へ出張しています。

2015年にはWater & Heritageという書籍の出版にあたりICID事務局長のTyagi氏と同書の一部を共著しました(2015 Tyagi, et.al)。また、原題"State of the World 2012"という書籍の訳本「地球白書2012-13」の一部翻訳(2015b 山岡)、日本水土総合研究所「海外情報誌ARDEC」への「WWCと世界の水議論～開発協力～SDGsの動向」と題するキーノート(2015c 山岡)及び農業農村工学会誌「水土の知」への国際農業研究協議グループ(CGIAR)に関する用語解説記事の寄稿のほか(2015d 山岡)、JIRCAS Newsletterなどに2編(2015f 山岡、2015 Yamaoka)、SRID関係ではジャーナルに2編とニューズレターに1編寄稿しています(2015a 山岡、2015e 山岡、2015g 山岡)。

2016～2018年の3年間には、エジプトのアスワンで開催されたICIDの第4回アフリカ地域会議(ARCID)に英文ペーパーを提出し発表を行ったほか(2016 Yamaoka, et.al)、農業農村工学会誌「水土の知」への持続可能な開発目標(SDGs)に関する用語解説記事の寄稿(2017b 山岡)、日本水土総合研究所「海外情報誌ARDEC」への「世界農業遺産と灌漑・水遺産」と題するキーノート及び書評の寄稿(2018b 山岡、2018c 山岡)、並びにSRID及びSALIBU関係で4編の著述を行っています(2017a 山岡、2017 Yamaoka, et.al、2018a 山岡、2018 Yamaoka, et.al)。

そして、定年退職直前の 2019 年には、国際学術誌 *Paddy and Water Environment* に SALIBU 再生稲栽培法関係の論文を掲載し (2019 Fitri, et.al)、インドネシア・バリ島で開催された ICID の第 3 回世界灌漑フォーラム (WIF3) に SALIBU 再生稲栽培法関係の論文 2 編を提出し発表しています (2019a Yamaoka, et.al、2019b Yamaoka, et.al)。また、日本水土総合研究所「海外情報誌 ARDEC」へ書評を寄稿しました (2019 山岡)。定年退職後 (JIRCAS にて再雇用) は、2020 年に国際学術誌 *Irrigation and Drainage* にガーナの稲作農民が共同で農業投資を行う意欲を引き出す取り組みを著述した論文を掲載し (2020 Yamaoka, et.al)、ガーナ政府への英文政策提言を書き下ろして JIRCAS から先方に提出したほか (2021 JIRCAS)、2020~2022 年の間に本稿を含む 6 編を SRID ジャーナルに寄稿しました (2020a 山岡、2020b 山岡、2021a 山岡、2021b 山岡、2022a 山岡、2022b 山岡)。以上、JIRCAS 時代の著述は、2010~2022 年の 13 年間で 60 編を数えています。

⑥ SRID (国際開発研究者協会) と共に

巷では定年退職後を第二の人生などと申しますが、私にとりましては、鼻息の荒い若手官僚であった 30 代終わりまでが第一の人生で、定年を待つまでもなく足を滑らせて人生の景色がガラッと変わった 40~50 代が第二の人生、そして定年退職後の現在は第三の人生という感覚です。振り返りますと、WWC (世界水会議) の理事 (Governor) を務めた 2012 年 11 月から 2015 年 11 月までの 3 年間で、低空飛行していた私の第二の人生では華の時期と言えましょう。この時期に、次女が東京大学理科 I 類に合格したことは、人生を迷走中の私には計り知れないご褒美でもありました。SRID との出会いはいずれも少し早く、2010 年の終りか 2011 年の年明けの頃ではないかと思われまふ。故高瀬国雄氏に入会を強く勧められ、私のアフリカ稲作の知見が SRID に必要とのこと、私もお役に立てるならと快諾した記憶があります。この頃は、新しい職場 (JIRCAS) で 1 年弱、CARD (アフリカ稲作振興のための共同体)、ICID (国際かんがい排水委員会)、INWEPF (国際水田・水環境ネットワーク)、世界棚田会議、FAO ワークショップなどの国際会議に出席して発言や発表を行ってきたものの、それがどの程度意味のあることなのかを疑問に思う自分、国家公務員として目指していたものには無いという空しさを拭い去れない自分がいました。

高瀬さんから、SRID には凄い人たちが参加していて、世界の開発協力問題に関して高邁な議論を行っているという、興味をそそられました。実は高瀬さんのお名前は偉大な大先輩の一人として存じ上げていたのですが、直接お話をしたことは一度あったか無かったかという、ご縁の薄い方でした。ただ、この 9 年ほど前の JIID (日本農業土木総合研究所) 時代に、私の発案で創刊し自ら執筆した「水土の地を語る」という書籍の創刊号を、国際派の大先輩の高瀬さんが絶賛しているという風の便りを伺ったことがあり、大変励まされたという記憶がありました。

SRID に出会った頃の記憶が薄れているので手許の記録を紐解きますと、2011 年 1 月に永田町「星陵会館」会議室で開催された SRID 新年会に出席しています。また、4 月の総会にも出席して 2011 年度の幹事会のメンバーに選出され、同年 6 月の SRID 懇談会で「アフリカ稲作振興の意味とネリカ」と題する講演を行っています。さらに、同年 8 月発行の SRID

ジャーナル創刊号の書評・論文紹介欄で“An Inquiry into Constraints on a Green Revolution in Sub-Saharan Africa: The Case of NERICA Rice in Uganda”という論文の紹介を執筆致しました(2011d 山岡)。当時は51歳、SRIDでは最若手の正会員でした。

その後私は、2021年度まで11年間連続で、SRID幹事会のメンバーとして、SRIDの運営のお手伝いをさせていただいております。2012年8月発行のSRIDジャーナル第3号から本稿が掲載される第22号まで、電子ジャーナルであるSRIDジャーナル計20巻のウェブサイトでの編集更新作業を10年間続けております。本誌(第22号)もこの原稿を仕上げ、他の原稿も合わせて編集委員会で閲読・手直しした後に、私が全ての原稿を電子ジャーナルとして編集し直してウェブ上に掲載します。この編集掲載作業をプロのウェブデザイナーに依頼すると、1号当たりの請求額が12~13万円の見積もりであると事務局から創刊当時お話がありました。私は素人ですが、ウェブサイトの技術的な知識が少しばかりありましたので、更新作業であればひょっとしたら私でも何とかできるのではないかと思い、ボランティアでの作業を申し出た次第です。これまで大きなミスや事故もなくSRIDジャーナルの定期刊行に貢献でき、10年間で250万円ほどの経費節約にも貢献できたことを振り返りますと、感慨もひとしおです

電子ジャーナルの更新をはじめとするウェブサイトの管理作業は、サーバー内のhtmlファイルを修正して行うわけですが、たった一か所のエラーで表示が乱れたり、全く表示しなくなったりします。このため更新作業には細心の注意が必要で、初めは少々悪戦苦闘し作業時間も長時間に渡りましたが、回数を重ねるごとにノウハウを蓄積し、作業も慣れてきました。ジャーナル以外のSRIDホームページ全体の更新作業も、10年間に渡り私がボランティアで行っております。

また、SRIDニューズレターは、「自論公論」をはじめ、SRID会員からの投稿を主体に、最新的话题などを会員に提供する媒体で、ウェブサイト上への掲載及びメールによる配信の形でほぼ毎月発行しております。これは、従来の段組みのない紙面が古臭い印象でしたので、現行のA4横3段組みのスタイルへの変更を提案し、2015年10月発行の第465号から刷新しました。段組みや図版・キャプション挿入の編集作業に慣れていないと手間がかかり、毎月のことなので骨が折れます。そこでこれも、6年以上にわたり、提案者の私が毎号の編集作業をボランティアでお引き受けし、2021年の11月で第515号を数えています。

SRIDジャーナルへ寄稿するコントリビューターとしては、上述の創刊号の論文紹介のほか、第2号の論説「世界の食糧問題の展望」(2012c 山岡)、第5号の論説「TICADVで明るみに出たサブサハラ・アフリカの農業開発の諸課題」(2013a 山岡)を執筆しています。また、第8号の途上国アルバム「訪問した14か国」(2015a 山岡)、第9号の論説「第7回世界水フォーラム(WWF7):世界の水議論の行方」(2015e 山岡)、第15号の開発の現場から「SALIBU:薬(ひこばえ)で目指す第二の「緑の革命」」(2018a 山岡)、第19号のエッセイ集(新型コロナウイルス感染症特集)で「新型コロナウイルスがくれた新たな「気づき」」(2020a 山岡)、並びに同号では「疫病と世界史、上、下」を紹介する書評「ミクロの寄生、マクロの寄生」を寄稿しています(2020b 山岡)。そして、第20~22号連載の「自撮りヒューマンドキュメンタリ第1~3部」(2021a 山岡、2021b 山岡、2022b 山岡)、さらには第22号

では専門分野外のホットな話題「カーボンニュートラル」をテーマとした論説「脱炭素化と国際開発協力」を上梓しています（2022a 山岡）。

また、2013年5月のSRID懇談会で「TICADにおけるアフリカ農業開発」と題する講演を行ったほか、2014年10月に東京大学農学部弥生講堂セイホクギャラリーで開催されたSRID設立40周年記念シンポジウム「G20時代の開発協力ー変貌するODAの役割と対応ー」では、大島賢三前JICA副理事長・元国連大使、下村恭民法政大学教授らと共にパネルディスカッションのパネリストを務めさせていただき、栄に浴しました。

SRIDでは懇談会、シンポジウム、フォーラム、今は休止していますがサロン・エカポールなど、私の知的好奇心を刺激する沢山の議論に接する機会を与えていただいております。また、上記のような数多くの執筆の機会も頂戴し、感謝しております。現在行っているボランティアの作業も、今後認知症を患うなどして覚束なくなるまでは、皆さまにご迷惑をおかけしない限り続けさせていただき、少しでもご恩返しができればと願っております。

⑦ 東洋大学国際学部「国際協力論」非常勤講師

東京大学での特任教授の任期を2009年末で満了し、行政官への復帰が叶うかもと抱いていた往生際の悪い淡い期待は、2010年4月からのJIRCAS行きを告げられて雲散霧消しました。その代わりJIRCASで研究者の末席に加えて頂き、これまでにない精神的な気楽さと物理的・時間的余裕を手に入れたのです。そこでタイミングよく、東洋大学国際学部での講義科目「国際協力論」の講師を担当しないかとの話が舞い込んできました。これは、私の農林水産省時代の先輩で、国連FAOの土地・水部長から帰任され東洋大学国際学部の教授に就任された吉永先生から、同大学のイブニングコースでの講義を一コマ受け持ってほしいと依頼され、2011年度からお引き受けしたものです。一コマ90分の講義が春夏学期に15回あり、以下のようなテーマで進めています。

第1講：イントロダクション

第2講：国際協力の基本概念ー経済協力と地球公共財

第3講：国際協力の歴史ー戦後復興～冷戦期の南北問題～BHN～SDGs

第4講：国際協力の仕組みーOECD/DACと政府開発援助

第5講：国際協力の仕組みー二国間開発援助と国際機関を通じた多国間開発援助

第6講：日本のODAの現状と課題

第7講：21世紀の新たな国際協力の潮流

第8講：貧困削減と飢餓撲滅への取り組み

第9講：社会開発とキャパシティビルディング・HDI

第10講：持続可能な開発と環境ODAー地球環境問題への貢献

第11講：国際平和協力・復興支援と人権・難民保護

第12講：開発途上国のオーナーシップとグッドガバナンスの構築

第13講：民間資本・投資の役割・問題点と官民協力

第14講：市民社会のNGO・企業のCSRとPPP

第15講：国際協力の現場で働くためのエントリーポイント

これらのテーマをご覧いただければわかりますように、国際協力の全般にわたる幅広い分野に跨る講義内容となっています。これは講師をお引き受けした際に、「国際協力論」の看板に相応しいラインナップを意識して、少し無理をして幅を広げたものです。これらは明らかに文系の先生のテリトリーで、農業土木学を基盤とした水資源開発管理や農業水利を専門とする理系の研究者から見ると、異分野教育ということになります。しかし私には、農業・農村開発を通じて国際社会で実際に見てきた、経験してきた材料が豊富にありますし、国際会議でも数多くの論陣を張って参りましたので、存外面白い授業ができるかもしれないと思い、お引き受けした次第です。

上記の多分野にわたるテーマをすべてカバーする既存の教科書が見当たらなかったため、手作りのテキストを作成し、それを毎年アップデートして用いて、2011年度から11年間に渡り講義を進めてきています。このため、自分自身もとても勉強になり、国際協力・開発援助に関する知識と経験の蓄積に大いに役立っています。もし、この講義をお引き受けしていなかったら、JIRCASに勤務した10年間の日々をこれほど楽しく充実して過ごすことができなかつたであろうと思うほどです。国家公務員の兼職禁止規定に抵触するので、この講義も9年間ボランティアで続け、定年退職後は遠慮なくお手当を頂戴しております。

11年間の経験を通じて特筆すべきこととして申し上げたいのは、COVID-19の影響を受けた2020年度の講義を完全リモートで行ったことです。翌2021年度は基本リモートで、4回ほど対面授業を行いました。これについては、SRIDジャーナル第19号のエッセイ「新型コロナウイルスがくれた新たな「気づき」」の中で詳しく触れています(2020a 山岡)。

リモートによる授業の具体的なやり方は、大学側の方針で、少人数のゼミ、あるいは実験系の講義などでは、ウェブカメラを使ったネット会議方式(Zoom会議など)で実施してもよいとされました。しかし、その他の一般の授業では、講師側が掲示板への書き込みやスレッドの掲載、あるいはあらかじめ講義を録画した動画や様々なファイルをアップロードして、受講生がこれらを閲覧、ダウンロードする方式で行うこととされました。学生側のインターネット環境が個人間で差があること、人数が多い授業が重なるとサーバーに負荷がかかってネット会議中に音や映像が途切れたり、シャットダウンしたりする恐れがあることがその理由です。

受講生から聞いたところによりますと、他の講義では、1時間半の講義時間にわたり、講師が講義する動画をあらかじめ録画し、それを90分間受講生に見せた後、課題を与えて翌週までにレポート提出させるというスタイルが多数派を占めているようでした。しかし、講師の話の録画で90分も視聴する受講生の立場に立つと、集中力が切れて話が頭に残らないだろうことは容易に想像がつきます。受講生の関心を如何に惹きつけ、90分間に渡り学習意欲を高く保たすか、いろいろと考えた末に、一つの結論に達しました。

講師の「語り」には曖昧さがつきまとい、講義の言葉は次から次へと流れて消えていきます。いろいろな前提や条件を省いて話すと、話している本人は当たり前前に理解できても、聞いている相手が理解できないということが往々にしてあります。前提や条件を省かずにきちんと書き込んだ文章は、より厳密な理解に有効です。文章ならば一度聞き逃したらお終いい

うことはなく、頭に入るまで何度も読み返せます。私は、どうせ初めてのことをやるなら、最大限の可能性を追求すべきと考えました。そこで私は思い切って、1時間半の講義で自分が話すであろうことを、全て文字に起こし文章にして、それを7~8回に分けて、10~15分間隔でスレッドに投稿して受講生に読ませることにしたのです。

まず、授業に入る前の準備として、例年のオリジナルテキストを講義の2~3日前にアップロードし、受講生に連絡してダウンロードと予習を促します。そして授業の本番では、テキストの解説や様々な背景やエピソード、関連する情報などを話し言葉で綴った文章をスレッドへ投稿します。加えて、2本のスレッドにつき1回くらいの頻度で、受講生に質問を投げかけて、10分間程度で回答を書かせて返信させます。授業中のミニレポート提出のようなものです。授業後、彼らの返信を読み、理解度などを分析して、さらに補足説明すべきことをまとめて、次のテキストのアップロード時に合わせて配信します。こういう作業を繰り返して、15講の講義をやり遂げました。

このやり方は、講義の準備とフォローアップの手間が従来の3倍以上かかります。準備に丸1日を要しフォローアップにも半日を要するので、正直大変でしたが、授業への集中力が続く、解説がわかりやすいと受講生にとっても評判がよく、さらに毎回4~5本の質問に回答を書かせているので、受講生のライティング能力もぐんぐん上昇してきました。良い文章を書くためのノウハウも講義で伝えて訓練したので、その効果が見える形で現れました。1時間半の講義で自分が話すことを、全て文字に起こすのは容易ではないとはわかっていましたが、これでやると決めて、毎週取り組んだ甲斐がありました。考え方を変えれば、講師がきちんと事前に整理して話すべきことを文章化しているのも、極めて効率性と効果の高い授業ができるし、もし来年も同じようなリモート授業を行うとしたら、少し手直しするだけで再利用できるので、大変なのは最初の年だけです。

例年よりもこの年の受講生は、講義内容をはるかに深く理解しており、学習意欲や問題意識も高いと感じており、講師としても十分な手応えがありました。これは、大教室の対面授業では再現できません。講師が話す講義は、どんなに話が面白くても、頭に半分も残らないでしょうし、ノートをいくらとろうとしても、集中力には限界があります。リモート授業だからこそ、テキストの解説であるスレッドも全て文字が残り、無駄なく、漏れなく、理解に結び付きます。スレッドの文章は、語りかけるような読み易い口語調の文体を心掛けました。これはかなり重要なポイントです。テキスト解説のスレッドが10~15分おきに投稿されてきますし、講師からの質問の回答も書かねばならないので、学生の集中力も途切れず、1時間半の講義を充実して受講できるのです。

⑧ SALIBU 農法との出会い

それは2014年1月から2月にかけて、インドネシアとケニアを一度に廻った海外出張での、思いがけない出会いが全ての始まりでした。この時の帰国後の出張報告書には、「1月31日(金)、インドネシア・スマトラ島西スマトラ州都パダンと近郊都市ブキティンギの間に位置するパダン・パンジャン村の東方12km地点にて、SALIBU農法の実証は場を視察

し、その栽培技術の聞き取り調査を行うと共に、同農法の発見者で、当地区で栽培指導を行っている農業省傘下の RAAD (Agency of Agricultural Research and Development) の地方事務所の研究者 Erdiman 氏と意見交換を行った。」とあります。

なぜ、スマトラ島のこの地に足を延ばしたのかと言いますと、当時私は、科学技術振興機構 (JST) の「農業水利サービスの定量的評価と需要主導型提供手法の開発」という研究開発プロジェクトに参加していました。同プロの外部資金による研究予算を 2011 年度に獲得していて、その中で農業水利サービスの海外事情調査を担当していました。私はどの開発途上国で現地調査をするべきか悩みました。これまでに私が最も馴染み深い国はタイで、農業水利の担当部局である王室灌漑局 (RID: Royal Irrigation Department) には親しくお付き合いしていた幹部職員も多く、十分な協力が期待できそうでした。しかしタイは、末端農業水利組織に関する既往研究が多く、新規性に乏しく少し手垢がついている感じがしました。

悩んでいた丁度その頃、2011 年 11 月にウガンダで CARD (アフリカ稲作振興のための共同体) の総会があり、その会議にインドネシア政府を代表して出席していた農業省の Dr. Harjito と意気投合し知己を得ました。会議のランチブレイクにたまたま私から声をかけたのがきっかけで、その後親交を深め家族ぐるみでお付き合いする仲になるとは、この時は想像もしていませんでした。また、翌 12 月にインドネシアのボゴールで開催された、インドネシア政府、OECD (経済協力開発機構)、ADB (アジア開発銀行) 共催の国際ワークショップ「食料安全保障のための持続的な水管理—インドネシアを中心とした農業用水政策改革の進展に関する国際政策対話」で、私は「末端水利施設及び水田圃場の水管理手法に係るインドネシア国への政策提言」と題する英語論文を提出し、発表を行いました (2011 Yamaoka, et.al)。この時、基調講演を行ったインドネシア農業省のルスマン・ヘリアワン副大臣と議場外で意見交換し、やはり意気投合して知己を得ました。

この時期にインドネシア政府関係者との知己を得る出来事が続いたのは、偶然とは思えません。また、インドネシアでは国営かんがいプロジェクトを公共事業省が実施していて、日本の農水省構造改善局はインドネシア公共事業省との関係が長く続いていましたが、公共事業省はもはや日本からの援助は必要ないとスタンスで、日本への対応が冷淡になりつつありました。公共事業省が管轄しているのはいくつかの国営事業の地区内のみで、そこでは末端まで同省が水利施設を管理していましたが、地区内よりも遥かに面積が広い国営事業のエリア外では末端水管理を農民グループが行い、それを農業省が指導、助成していました。しかし、構造改善局は農業省との付き合いがなく、その情報はほとんど日本に伝わっていません。そこで私は、JST 研究開発プロジェクトでの農業水利サービスの海外事情調査をインドネシアで、農業省の協力を得て行おうと決心しました。

具体的には、インドネシア各地の末端農業水利組合を訪問して、メンバーの農民たちに集まっていたいただき、質問票によるアンケート調査を行います。この調査の協力をインドネシア農業省農業インフラストラクチャー・施設局にお願いし、スタッフの一人である Dr. Resfa Fitri に調査のアレンジと現地の案内をして頂きました。Dr. Harjito も喜んで調査に参加してくれて、2 年目以降はインドネシアでの調査が内心面倒くさくなっていた私を事ある毎に励ましてくれました。Dr. Harjito は現在、役所を辞めて大学教授になっていますが、彼に

は今でも心から感謝しています。2011年度はジャワ島中部並びにロンボク島の各地を、2012年度はジャワ島中部とロンボク島の再調査、2013年度はジャワ島西部、東部とバリ島の委託調査並びにスラウェシ島及びスマトラ島の調査を行いました。このスマトラ島の西スマトラ州ブキティンギが Dr. Resfa Fitri の故郷であったことから、同島での調査を強く勧められ、2014年の1月に私は生まれて初めてスマトラ島に足を踏み入れたのです。

この時、Dr. Resfa Fitri から、故郷の近くで是非見せたいものがあると言われ、現地調査の合間に SALIBU 農法の実証ほ場に立ち寄り、同農法の発見者 Mr. Erdiman から直接同農法の栽培技術について聞き取ったのです。目から鱗が落ちるとはこのことで、水田稲作の本作の収穫後にそのまま残した切株から生えたヒコバエ（再生稲）を育てても、通常その収穫量は本作の2～3割程度、多くても5割止まりというのが常識です。水稻ヒコバエ栽培の研究は世界中で長年に渡り無数に行われており、この常識が研究者たちの結論となっていますが、これに反して SALIBU 農法では10割前後の収穫量が得られるのです。しかも、代掻き及び田植えが不要なので、労働力や農業用水の投入量を大幅に節減でき、熱帯地方では最大1年に3.5回、2年で7回連続収穫できる画期的な農法です。



本作収穫後の切株 切株の根元から生えた再生新茎（ひこばえ） 本作と遜色ない収穫量

私はこの SALIBU 再生稲栽培の現場を生まれて初めて見て、Mr. Erdiman から聞き取った内容を JIRCAS の出張報告書に以下の通り取りまとめました。

「通常農法では、元茎に実った籾を収穫後の再生新茎（ヒコバエ）からの収穫量は、気温や肥料などの諸条件により大きく左右され、一般的に元株からの収穫量よりかなり少なくなる。日本では気温が低すぎて不稔となり枯死する場合も多いが、極早生種や早生種を早刈りして適宜追肥した場合には元茎からの収量の最大 50%程度の収量が得られることもある。飼料用米としては、株出し栽培 (ratoon cropping) の適品種である台湾の在来品種 Taporuri を用い、基肥を多く施用した西日本の水田において4月中下旬に移植し、7月下旬～8月上旬の穂揃期に1回目を収穫および追肥し、10月下旬～11月上旬の黄熟期に2回目を収穫する2回刈り栽培を行って、全刈りで19 t/ha、このうち元茎からの1回目の乾物収量10 t/ha に対して、ヒコバエからの2回目の乾物収量9 t/ha という極めて高い収量を得た例もある (http://www.cropscience.jp/award/pdf/award_14_02.pdf) が、市場に流通可能な品質の良い主食用の籾を株出し栽培で生産することは一般的に日本国内では困難である。熱帯地方の例としては、出張者はケニアのナイロビ郊外で灌漑稲作を行うムエア地区にお

いて株出し栽培による収穫を目撃したことがあるが、この時の聞き取りによればヒコバエからの収穫量は元茎からのその2~3割程度である。この場合は元茎に実った籾を収穫後に、そのままの状態では追肥は行わずに灌漑による湛水のみを行い最小限の労力投入でヒコバエを育て、主食用として収穫している。

これに対して SALIBU 農法では、縦横それぞれ 26~28cm 間隔で田植えを行った元茎に実った籾を落水せずに通常よりも一週間早く収穫した後、水田土壌が湿った状態で（乾いていたら 2~3 日間湛水させて）除草剤を散布する。元茎から収穫してから 7~10 日後に水田土壌がやや乾いた状態で、動力草刈り機を用いて地表面から 3~5cm のところで元茎を短く切り揃え、切断した茎は土中に鋤き込み、ごく少量の水を灌水して水田土壌を湿った状態に保つ。この状態を続けて、元茎から収穫してから 20~25 日後に、元茎が残った株もとにクワを入れ、株の根元に左手を深く添えて株を引き抜く。その株を 3 つ程度に小さく分け、そのうち一株を先ほど引き抜いた場所に左手を添えながら植え直す。湛水深は 2~3cm を維持しつつ、この時期にアンモニア尿素肥料 75kg/ha と複合肥料 (Phonska) 50kg/ha を追肥し、さらに元茎から収穫してから 40 日後にそれぞれ同量を追肥する。

SALIBU 農法では、収穫までに要する日数が従来農法よりも 20%程度短く、元茎から収穫してから 100 日後にヒコバエから収穫でき、収穫量も元茎からの収穫量より 10~20%程度増加する。その大きな理由は、元茎をヒコバエの新芽が出てくる部位よりも低い位置、即ち地表から 3~5cm のところで短く切るため、新芽は元茎から出ずに根元から出る。さらに、その新芽に直結して新たな根が生えるため、ヒコバエは元茎の根と新たな根の両方から水分と養分を吸い上げることができるからであると考えられる。当初 5 年間程度自費で研究を続けた後、2012 年に研究費を得てこれまでに 10 品種以上の試験栽培を行い何れの品種にも適用可能であることを確認すると共に、22 か月で 6 回の収穫を得ている。

SALIBU 農法は、従来農法と比較して、代掻き・育苗・田植えが不要となるなど労働費が約 35%減少し、種籾が不要となるなど投入財費が約 20%減少して、生産費が約 30%減少する一方で、年間に 0.5~1 作余計に収穫でき年間収穫量が 4~6t/ha 増加する。このため、農民の年間収入は 1 ha 当たり 2,000 万ルピア~2,500 万ルピア増加する。さらに、切断した稲わらを土中に鋤き込む環境に優しい有機農法の側面も有している。」

農業土木技術者である私は、農業用水を節水できることには興味が湧きましたが、栽培学や植物生理学の専門家ではないので、この研究は自分ではなく別の専門家が追うのが本筋であると考えました。しかし、JIRCAS の誰もこの報告書に目を留めず、月日が流れました。

⑨ SALIBU 再生稲栽培法の研究

JIRCAS では 5 年間を一つの区切りとして、研究所全体の中長期計画を立て、研究者は全てこれに沿って研究を進めます。2011 年度に始まった第 3 期中長期計画は 2015 年度で終了し、2016 年度から 2020 年度までの第 4 期中長期計画がスタートすることになっていました。2015 年の終わり頃でしたでしょうか、翌年度から新たに始まる中長期計画に沿って具体的にどの国や地域でどんな研究をするのか、研究者はそれぞれ研究課題とその 5 年間

の実施計画を固めつつありました。

私は、それまでアフリカで稲作研究を少し手掛けてきたので、まずは西アフリカのガーナで実施する研究課題を立て、実施計画を策定しました。それは、アフリカでの稲作技術の普及システムを強化するため、稲作農民グループ (FBO: Farmers Based Organization) への新たな融資スキームを含む、求心力の高い FBO を設立し運営する社会実験を実施するものです。しかしこの研究課題だけでは少し手持ち無沙汰なので、アジアでも一つ研究課題を立てたいと考えていました。その時に頭をかすめたのが、あの SALIBU 農法はその後どうなったんだろうかという疑問です。あれから 2 年近くが経っています。

とりあえず SALIBU 農法に関する英文の論文を検索しましたが、一つもヒットしませんでした。インドネシア語の論文は 1 本だけ見つかりましたが、Mr. Erdiman の名前はありませんでした。私はこの時、アフリカのマダガスカルで宣教師が独自に開発し、その後これを米国の研究者が発見して世界に紹介し普及している SRI (System of Rice Intensification) という水稻の稚苗 1 本植え栽培法のことを頭をよぎりました。この栽培法は田植え時に労働力が若干余計に必要なものの、農業用水量を節減でき、収量も増大させることができます。しかしこの栽培法を日本に紹介したのが農業用水量の節減に目を付けた農業土木の研究者グループであったことから、肝心の栽培学者の間ではスルーされ、日本では栽培学や植物生理学の研究にまともに取り上げられることなく、現在に至っています。研究分野間の主導権争いというか、研究者グループ間のさや当てというか、研究者たちの世界にはどうも私には理解しがたい力学が働いているようです。大事なことは農家の生活や公共の福祉の向上であり、世界の食糧危機を未然に防ぐことで、誰が研究して功績をあげても良いはずなのに、狭い研究の世界で鎬を削る生活が長くなると、初心を忘れてしまうのかも知れません。

私は、田舎の研究者、しかも学位 (博士号) もなく、英語の読み書きもできない Mr. Erdiman が開発したこの画期的な再生稲栽培法を、インドネシアの農学研究者たちが黙殺しているのではないかと考えました。研究者の世界のことはよくわかりませんが、それぞれの分野には独特のヒエラルキーが存在し、その上位に君臨する大御所や実力者が首を縦に振らないものは、干される運命なのかもしれません。しかし、この SALIBU 再生稲栽培法は現在の小規模で貧しい稲作農民を救う農法であり、また、農地面積を拡大せず、新規の水資源開発も必要とせず、これらの資源を節約しながらコメを増産できる、人口と食料需要が増大した未来の地球を救う画期的な栽培法です。これを確立したものとするには、未解決の問題点を研究開発により克服していく必要があります。

私は、まずはこの栽培法を「第 2 の緑の革命」につながる技術として、開発者の Mr. Erdiman の名前とともに世界に紹介していくべきとあると考えました。そのために Mr. Erdiman と共著の英語の論文を発表したいと考えたのです。Mr. Erdiman も彼なりにデータを取っていましたが、素人の私から見ても研究論文としては不十分な内容でした。そこで、何か見えないしらがみがありそうなインドネシアではなく別の途上国で、第 4 期中長期計画の中の研究課題に位置付けて栽培研究をしっかりと行い、信頼できるデータを取り、論文化したいと思いました。2020 年 3 月の定年退職まではまだあと 4 年あります。

さて、どの国がこのような研究と一緒に取り組んでくれそうでしょうか。私には全くアテはありませんでしたが、直感でミャンマーを選びました。2015年の終わり頃の時点で、JIRCASにとってミャンマーは共同研究の処女地でした。手垢が全くついていない国ならば、農業土木技術者の私が持ち込む栽培学の研究を受け入れてくれるかもしれない。それと、この研究自体がJIRCAS内では異端視されているので、批判を受けて潰されやすいのですが、これまで取り組んだことのない国でのパイオニア的研究であれば、JIRCAS内部でも黙認されるに違いないと踏んだのです。

この目論見は見事に当たり、2016年7月、私は生まれて初めてミャンマーを訪れ、首都ネピドーの近郊都市イエジンに所在するミャンマー農業畜産灌漑省(MOALI)農業研究局(DAR)で共同研究の構想を説明し、先方の理解を得て研究をスタートさせたのです。私の現役最後の4年間は、このSALIBU再生稲栽培法の研究に支えられました。ミャンマーには4年間で20回渡航しました。最初の1年余りの間は、Mr. Erdimanと、英語を話せない彼と私の間の通訳者としてDr. Resfa Fitriをセットで、JIRCASの研究費で計4回ミャンマーに招聘し、彼らから直接技術移転するという形をとりました。現在も続くDARでの共同研究の開始・推進にあたっては、水利用研究セクション(WURS)のDr. Khin Mar Htayセクションチーフから絶大なるご理解と協力を頂き、彼女からの進言でNaing Kyi Win局長が本研究への積極的な期待と支持を寄せて頂いたことが決定的に重要でした。彼女は2019年末に定年退職しましたが、彼女の部下であったKyaw Myaing氏が、今は別の部署のチーフとなり、SALIBU農法へのコンバインの導入に関する共同研究を続けています。

その後、この研究は順調に発展し、JIRCASの後輩研究者にも引き継がれて、次々と成果を上げて論文を執筆し発表しています。私は定年退職の直前に、このSALIBU再生稲栽培法の研究を名目とした日本学術振興会の研究費を得ることができましたので、細々ながらも暫くは研究活動を続けられそうです。そこで、この分野で日本の第一人者である鹿児島大学の坂上教授との共同研究や、高知県の農家の協力を得た日本国内での再生稲二期作の試験栽培、あるいはJICAからの要請でセミナーの講師を務めるなど、できることを進めています。ミャンマーでは2020年から、これまでは収穫時の手刈りが原則であったSALIBU再生稲栽培法に、小型コンバインによる収穫が適用できないか否かを検証するための栽培試験を続けています。ミャンマーの農村では近年、コンバインのレンタルによる利用が農民たちの間で急速に普及拡大しており、こうした動きはアジアの他のLLDC(後発開発途上国)の農村でも始まるだろうと考えられるからです。

しかし、COVID-19のパンデミックが始まった2020年3月を最後に、海外への渡航が叶わずメールのやり取りと海外送金のみで研究の糸が切れないように凌ぐ日々が続いています。ミャンマーではさらに、2021年2月にクーデターが勃発し、その後の国軍による強圧的な施政が続くなかで、首都ネピドー郊外のDARでは奇跡的に何とか栽培試験が継続している状況です。ミャンマーの情勢が一日も早く正常化し、人々の往来が再開することを願っております。SALIBU再生稲栽培法の研究について詳しくは、SRIDジャーナル第15号の「開発の現場から」に掲載されている「SALIBU: 藁(ひこばえ)で目指す第二の「緑の革命」」などをお読みください(2018a 山岡)。さらに最新の研究成果は、いくつかの英文論文に取

りまとめられています (2017a 山岡、2017 Yamaoka, et.al、2018 Yamaoka, et.al、2019 Fitri, et.al、2019a Yamaoka, et.al、2019b Yamaoka, et.al)。

⑩ ガーナでの FBO 研究

西アフリカのガーナへは、成田空港からアムステルダムなどヨーロッパの都市経由、あるいはミャンマーへの出張と抱き合わせてバンコク、さらにドバイなどの中東経由で向かいますと、フライトだけで片道 20 時間近く、乗り継ぎや途中泊などを加えると片道 2 日がかりの旅となります。ガーナへは 2010 年度に 2 回と、2015～2019 年度に 15 回の計 17 回訪問しました。しかも、首都のアクラに到着後、そこに留まって会議に出席するような出張とは異なり、アクラから車で東へ 2 時間半のイースタン州の農村現地、並びに同じく車で北西へ 6 時間のアシャンティ州の農村現地を廻って調査研究を行います。そして再び首都に戻ってカウンターパートの食料農業省 (MOFA) と情報交換や協議を行うパターンです。それを十数回よく続けられたものだといながら感心します。これだけでも物語が一つ書けそうですが、長くなりますので、調査研究の内容、結果等につきましては論文をご参照ください (2016 Yamaoka, et.al、2019a Yamaoka, et.al、2020 Yamaoka, et.al.)。これらは全て英文のペーパーなので、合わせてアフリカ関係について広く記述している和文のペーパーもご参照ください (2012a 山岡、2012f 山岡、2013a 山岡、2013e 山岡、2015g 山岡)。

FBO (Farmer Based Organization) とは、いわゆる農民組織を意味しますが、その中でも特に集落レベルで組織される相互扶助的な農民組織を指す用語です。まず、ガーナの FBO がどのようなものなのか、現地に出向いてマンゴー農家や野菜農家の集落の FBO の実態をこの目で確かめました。ガーナでは稲作はそれほどメジャーではなく、FBO を助言し指導する農業普及員も稲作農家へのサービスは後回しにしがちです。そこで、実際に農業普及員と共に、稲作農家の集落で FBO を立ち上げる社会実験を行い、組織への求心力とパフォーマンスを高めるための要因を探るのです。ガーナの小規模稲作農家にとっては、収穫機 (ハーベスタ) や脱穀機を共同で手に入れて人力作業の負担を減らすことが一番の望みです。それを実現するための手立てを社会実験で実証します。何しろ対象となるのは、銀行の預金口座を開いた経験がないような貧しい稲作農家たちなのです。

社会実験の経過はその都度、カウンターパートの食料農業省普及サービス局 (DAES) に報告、情報共有したうえで、5 年間の調査研究の成果として政策提言をとりまとめて、JIRCAS から DAES に提出したところです (2021 JIRCAS)。

最後に—番外編—私の健康とスポーツ歴

—スリムな子供～学生時代

私は、子供の頃からスポーツは好きなものの、あまり上手な方ではありませんでした。出生時は 3,600g を超える健康優良児だったのですが、体が細身で、肌が真っ白な少年でした。小学校 4 年生くらいの頃、京橋と銀座の境目あたりに所在した警視庁の警察 PR センターで、剣道を習い始めました。母親からの半強制でした。面や胴、籠手などの防具を着用する

と夏は蒸しますし、冬の道場は板床が凍てつくように寒く、足が凍えて痺れました。正直言って剣道は肌に合っていませんでした。ところが、5年生の時だったかと思いますが、小学校の体育の授業で、鉄棒に逆手懸垂状態で顎を鉄棒より上に保つ姿勢をどれだけ長く続けられるか、一人一人ストップウォッチで計測する機会がありました。友達たちは数秒から10秒前後がやっとでした。クラスで一番のスポーツマンでガキ大将の若林君が30秒前後で断トツだったと思います。それを私は、1分間以上保つことができ、クラスで一躍トップに躍り出ました。剣道を続けていたことで、思いがけず腕力が鍛えられていたのです。

小学生の頃は、男の子ですから野球などボール競技やボーイスカウト・カブスカウトに憧れていました。しかし現実には、運動会の徒競走ではいつも最下位（4人中の4位）でした。そこで6年生の時に一計を案じて、予選でわざと力を抜いて脚の遅い4人組グループに入り、本番では全力を出して4人中2位になり、嬉しかった思い出があります。そもそも、本番の組み合わせを決める予選で全力を出す馬鹿正直な子は私くらいだったのかもしれませんが。こんな調子の子でしたが、運動会の長距離走では心臓が飛び出すくらいまで頑張り、何とか入賞しました。また、築地小学校は水泳の指導に力を入れていて、課外活動として千葉県館山の海の沖合で6年生のとき遠泳大会が行われました。私は志願してこれに参加し、4.5kmを2時間3分で完泳し、浜に泳ぎ着いた時には消耗しきって水から上がれず、四つん這いにもなれなかった思い出があります。この遠泳大会に出場するためには、クロールと平泳ぎを確かそれぞれ50m泳げることが条件となっていました。私は平泳ぎで50m泳げたもののクロールを25mしか泳げず出場資格がないのに先生に願い出て、特別に許可をもらい出場させていただいたのでした。運動神経はお粗末で体力も平均以下でしたが、苦しいことに耐えることだけは歯を食いしばって最後までやり遂げるという子でした。

麻布中学では、校庭の片隅にテニスコートがあり、当時の皇太子殿下と美智子妃殿下のテニスコートでの出会いなどへの憧れもあって、軟式テニス部に入部しました。しかし、腹筋などのハードな練習に1ヶ月で音を上げて退部し、練習が楽そうな卓球部に転部します。ハイカラ好きの私は、一般的なペンホルダーではなく、シェイクハンドのラケットで、プレイスタイルは前陣速攻でした。卓球部時代に1,500mを5分20秒で走る走力を身に着けたことは第1部でご紹介した通りです。部活は中学3年まで続けましたが、高校1年から放課後に予備校に通いだしたので、練習に出られなくなり、フェードアウトします。麻布中学の体育の時間は毎回、タッチフットボールのゲームを行うのが慣例でした。目立ちたがり屋の私は、ダッシュ力が乏しいにも関わらず、オフェンスでは華やかなワイドレシーバーかスプリットエンド、ディフェンスではインサイドラインバッカーをやらせていただきました。高校生時代の私のスポーツ歴は、全く見るべきものはありません。ガリガリの身体が益々痩せて、猫背で歩く高校生でした。

東京大学では、駒場のキャンパスに弓道場があり、運動会所属のガチの運動部の中では一番練習も楽だと聞いて、弓術部に入部しました。弓を引く動作がまるでエキスパンダーを使うボディビルのような効果を発揮し、それまで肋骨が浮き出していた胸板が少し厚くなり、肩幅も広くなりました。しかし、弓術部も1年余りで退部します。3年生になり本郷キャンパスの農学部に進学してからはスポーツから遠ざかり、大事な時期に身体創りを怠ります。学生

時代はよく遊んだ方だと思いますが、ボーリングやビリヤードなどインドアの遊びが多く、そのため色白の肌はそのまま、小麦色に日焼けした肌の同級生たちを羨ましく思いました。学生時代は 175cm、57kg のスリムな体型を維持します。

－運動不足で石のお地蔵さん

農林水産省に入省後、最初の本省勤務で夜遅くまで働く不摂生な日々が続き、体重が 1 年間で 9kg 増量し 66kg となります。本省の地下の食堂での夕食後、勤務に戻り、再び深夜に背油たっぷりの屋台ラーメンを食べる生活が祟りました。1 年後、三重県安芸郡安濃町という山の中のダム建設現場に近い中勢用水農業水利事業所安濃支所に配属となり、所内の駐車場スペースを改造した手作りのテニスコート（クレア）で、放課後は日没まで毎日テニスに没頭しました。ここでテニスを教えてくれた係長の林さんは、右利きなのですが、私と対戦するときには 10 年早いと言って、ラケットを左手に持ち替えて、軽くあしらわれました。三重県津市の本所に異動してからは係長の坪井さんにゴルフを教えて頂き、テニスとの両刀遣いになりますが、3 年後の 1986 年に 26 歳で愛知県南知多町の南知多開拓建設事業所に転勤すると、テニスからは遠ざかります。その後、東京の本省に戻り、ゴルフの打ちっ放し練習や、年に数回のコンペでのラウンドが唯一の運動の機会となります。その他のスポーツは殆どできずに体重 60kg 足らずのガリガリの細身のまま 29 歳で結婚します。

結婚後は、お決まりの幸せ太りで、恐らく 65kg 近くになったであろうと思います。1991 年に 31 歳で家族共々オランダへ渡り、日本人コミュニティーがインドアコートで開催している月 1 回程度のテニスを楽しむ機会を得ます。3 年間のヨーロッパ生活の後、帰国してからは本省での激務が 5 年間続きます。この間、年に数回ゴルフで体を動かす以外は全くスポーツらしいスポーツはせず、肩と首の酷い凝りが続いて、整体接骨院通いが週末の日課になります。靖国神社の裏にあった諏訪長生館という少し怪しげな整体接骨院で、背骨をバキバキと伸ばしてもらうのです。帰国してからの 30 代後半は仕事で身体を酷使して、それまでの貯金を全て使い果たしたようなものです。石のお地蔵さんのように固い首肩で、本当に辛かったという思い出だけが残っています。

－減量の成功体験

1999 年に 39 歳で山口県へ転勤しますと、早朝のソフトボール練習や、長距離走などで体を動かすようになり、ゴルフのコンペも月に 1 回程度のペースに増えます。県庁の課長という管理職ではありましたが、それなりにスポーツに積極的に取り組み、健康な身体を取り戻した 2 年間でした。そして 41 歳で東京に戻りますが、外郭団体の部長職となり多忙で責任も重く、たまにゴルフコンペに出る以外は全く運動しなくなります。この職場から 2003 年に 43 歳でつくばに転勤した時がチャンスだったのですが、平日は毎日東京から車で通勤し、歩くことが全くありません。何とか、週末もつくばに出かけてテニスをするように努め、東京での勤務時よりはスポーツに時間を割くようにしました。

つくばへの毎日の車通勤は朝晩片道各 1 時間、それを 2 年も続けると、それまでは盤石であった私の腰にダメージが蓄積しました。2005 年 9 月に国際会議での発表のため北京を訪れます。この時にあまりの腰の痛さに耐えかねて、懇意にしていた北京の大学の先生に相

談すると、病院を紹介してくれました。中国 4000 年の歴史の漢方処方です。中国の病院は本当に大丈夫だろうかと少々不安でしたが、訪れた病院で症状を訴えると、「骨科」を受診するよう指示されます。そこで問診された後に「按摩科」へ回されました。そこで整体マッサージでもしてくれるのかと思いましたが、詳しく問診を受け触診の後、「原因は毎日の運転時の姿勢です。車の運転席の背もたれを倒さず直立させて深く座って運転しなさい」との指導だけで終わりました。按摩もマッサージも膏薬も頓服薬もなく、これだけです。すっかり肩透かしを喰らわされましたが、帰国後、この言葉を思い出して実践してみました。1 か月、2 か月と続けるうちに腰の痛みが緩和されてきて、何と半年後には完治していたのです。この頃の体重は 67kg 前後であったと思います。

これが中国 4000 年の漢方の極意か、と感激しました。しかし一方で、中年太りの年齢に達していた私の体重が、運動不足からいつの間にか 72kg を超え、下腹も出てきて危機感を覚えたのが 2007 年の年末、48 歳の頃です。当時、任天堂の Wii Fit が発売されて爆発的なブームとなりました。いつもは食っちゃ寝の正月休みに Wii Fit でゲーム感覚のトレーニングを始めると、例年は正月休みの間に 2~3kg 増量していたのに、この年は増減ゼロでした。これに気をよくして Wii Fit のゲーム兼トレーニングを 2008 年の正月明けから、就寝までの時間パジャマ姿で 30 分から 1 時間程度毎日続けたところ、同年 6 月までに 11kg 減量し 61kg のスリムな身体に戻りました。Wii Fit というのは、左右の脚から伝わる体重を別々に計測するヘルスマーターのようなもので、これに乗って前後左右に細かく重心を移動させると、TV 画面の自分のアバターが前後左右に動きます。アバターを操作して、例えばスキーの滑降競技、ビルからビルへの綱渡りなど、楽しみながら体幹を鍛えることができます。

ーテニスに向き合い始める

この、半年間で 11kg の減量は劇的な成功体験でした。何よりも大事なことは毎日継続することで、ジムや施設に通うのでもなく、いちいち着替える必要もないことが重要なポイントでした。出世街道から転げ落ち、前年には母を亡くし、知らぬ間に鬱状態と診断される精神状態にまで落ち込んだうえ、脂肪太りで体が重い。そんな 3 重苦のうち、中年太りだけは見事に解消できたという成功体験は、気持ちを少し前向きにさせ、自らを肯定するための一里塚となります。そうなるに欲が出てくるもので、中高年になってから 20 歳時の体重に戻すのは殆ど不可能と、何かの文章に書いてあったのを読み、これに挑戦しようと思立ちました。食事や水分摂取の管理を徹底的にストイックに行い、2008 年の秋にはついに 20 歳時の体重である 57kg 台に到達します。しかしさすがに 57kg は痩せ過ぎで、体脂肪率も 11% を切るところまで下がりましたので、冬場の寒さに耐えられず、風邪をひきやすくなるなどの弊害が出ました。176cm の身長で体重を 60kg 以下に維持するのは容易なことではなく、また、不健康なことがわかりましたので、ストイックな生活を緩めました。その結果序々に増量して行き、1 年後には 62kg 前後で安定します。

2010 年に 50 歳で JIRCAS に転勤してから、私のスポーツに対する取り組みが劇的に変化します。つくば市に所在する JIRCAS には、私のデスクがある建物のすぐ裏に、全天候型の砂入り人工芝オムニコートが 2 面あり、シャワー室のある小さなクラブハウスも隣接しています。さらに、私の同年代を中心にテニスを愛好する職員が多く、昼休みには毎日数名

～十数名くらいがコートに出てきます。そこで私も、毎日の 1 時間の昼休みを全面的にテニスに振り向けることにしました。昼休みの鐘が鳴るとサンドイッチ、牛乳とバナナで昼食を 5 分で済ませ、着替えてコートに出て 40 分間打ち合い、シャワーを浴びてデスクに戻るというルーティンを確立します。海外出張期間中を除いて、本当に毎日の昼休みと、日没が遅い夏場はさらに放課後の 1～1.5 時間をテニスコートで過ごしました。

しかし、きちんとテニスを基礎から習うわけではなく、三重県の安濃支所時代に林さんから教わっただけの自己流のテニスの延長線上でした。いろいろなプレイヤーの打ち方を見様見まねで自分のプレーにも取り入れていく、というスタイルです。仲間内でのダブルスのゲームしかしませんので、はっきり言って上達は遅々としていました。対外試合はトスリーグという年 2 回のダブルスのチーム戦だけです。これは、つくば市内で総勢 2,500 名前後が参加する巨大な大会で、ダブルス 3 ペアの 6 名でチームを構成します。男子は最上位の A クラスから G クラス（近年は少なくなり E クラス）くらいまであります。各クラス 32 チームのトーナメントで、2 試合を連勝すると上のクラスへ昇格し、連敗すると下のクラスへ降格します。私が所属しているチームは主に B クラスでした。

初めの頃は、試合に出るたびに緊張感で足腰が震え、腕が縮こまり、まともなゲームができませんでした。練習の時の 6～7 割のパフォーマンスがやっとです。いい年をして恥ずかしいものです。何年か続けるうちに、8 割 9 割の力を出せるようになると、上手なプレイヤーと自分との差が明確に見えてきます。何とか上達できないものだろうかと考え、そのためには仲間内でプレーするだけではだめだ、他流試合をしようと考えました。2015 年に初めて、つくば市のダブルスの市民大会にエントリーし、その後も何回か試合を行いました。しかし、都内に住む私がつくばでダブルスの試合に出るのは、ペアを組むのにも一苦勞です。

一本格的テニスプレイヤーへの道

そこで 2016 年、56 歳の頃に、初めてシングルの市民大会にエントリーして出場しました。精一杯戦ったのですが、相手が一枚上手だということがよくわかりました。相手から、テニスは上手いがシングル慣れしていないようだと言われました。この言葉は的を射ていました。その頃の私は正直、シングルのゲームですと 6 ゲームの試合がしんどく、試合後には足が攣って車を運転できないほどでした。無駄な動きが多かったのだと思います。でも、シングルの試合を行うことを諦めませんでした。2017 年にプチシングルという 1 試合 15 分間の時間制の、2～3 時間で 5 試合ほど行う大会があることを見つけ、松戸市で開催される大会に頻繁に出場して試合勘を養いました。と言いましてもよく負けました。小学生高学年か中 1 くらいの少年にも負けました。

2017 年の後半には少し体力がついてきて、6 ゲーム 1 セットマッチを戦っても足が攣らないようになってきました。そこで、埼玉県内のテニススクールなどを会場にシングルの大会を頻繁に開催しているインスピリッツの試合会場にもよく足を運びました。こちらは、6 ゲーム 1 セットの試合を 1 日に 2～3 試合行います。その他、幕張のフェローズテニススクールが主催するシングル大会にも出場するようになります。ここはインドアですが、優勝すると賞品として商品券をもらえるので、かなり真剣に争います。ここでは 6 ゲーム 1 セ

ットのシングルスゲームを1日最大4~5試合しました。そうした経験を積んだ後の2018年の後半に、日本テニス協会(JTA)がベテランテニス選手登録制度(JOP: Japan Official Point)を運営していることを知ります。これは、全国各地で開催される公認大会で、1年間有効なランキングポイントが大会のグレード毎に設定され、それを獲得すると全国ランキングに位置付けられるというもので、プロのランキングと似た制度です。

プロは35歳までで、35歳を超えるとベテラン選手となります。5歳刻みの年齢別の枠の中で試合を行い、ランキングポイントが付与されます。私は2019年4月から、60~64歳の年齢枠に選手登録し、全国550位くらいからスタートして、2021年10月末現在で全国152位までランキングを上げてきました。今の私の夢であり目標は、病気や怪我をしないようにテニスをできるだけ長く続けて、70歳の時に全国20位以内に入りたいというものです。年に1回開催される最高峰の全日本ベテランテニス選手権大会の本戦に予選無しで出場するためには、概ね20位以内のランキングが必要だからです。



—老後の身体との付き合い方

これまで毎年人間ドック検診を受診し、身体の変化をモニタリングしてきました。多くの方がそうであるように、私も30代までは全てが基準値内でパーフェクトでしたが、40代以降は高脂血症、脂肪肝、高尿酸値症などのいわゆる生活習慣病のモグラたたき状態となります。このうち高尿酸値症は山口県庁時代に診て頂いた先生から、この病気は体質によるところが大きく、食事療法では際限がなくQOLも下がるので、薬で尿酸値を抑えては如何かと勧められました。ただし、一生薬を飲み続けなければならないが、覚悟はできるかとのこと。食べたい物が食べられないのは人生の楽しみを半分奪われるようなものなので、薬を飲み続けることを選択しました。それ故、41歳の時から尿酸値を下げる薬を21年間飲み続けています。コレステロール値もやや高めなので、こちらの薬も合わせて服用しています。恐らくそのせいだと思われるのですが、腎臓の機能がやや低下しているのが今は気がかりです。一度落ちた腎臓機能は復活しないので、現状維持に努めるしかありません。

2015年1月の正月休み明けですが、直前までテニスもして何の兆候もなかったのに、午後から突然身体の調子がおかしくなり、39℃以上の発熱と悪寒に襲われました。いわゆる悪寒戦慄という、身体全体がガタガタと震えだして止まらない状態で、これはおかしいと夕方時間外に虎の門病院の救急外来へ駆け込みました。検査の結果、急性前立腺炎から敗血症一步手前の症状を起こしているとのことで緊急入院となり、6日間入院しました。症状は、排尿時に激痛がある他は発熱と悪寒だけで、頭痛や関節痛もなければ、鼻水も咳も出ません。要するに血管内に細菌が大量に侵入して全身に回り、全身の免疫システムが一斉に発動して高熱を発したのです。抗生剤と解熱剤の点滴で回復しましたが、初期対応が遅れて敗血症に至ってしまうと多臓器不全を起こし、命取りになることもあります。何とその3年後の2018年の1月下旬の、ミャンマーに出張に出る予定日の前日に、再び同じ症状で39℃以上

の高熱を発症して、海外出張を急遽取りやめて6日間入院しました。もし一日遅れて、ミャンマー行きの中かミャンマー国内で発症していたらと考えるとぞっとします。3年前の経験があったので出張取り止めに早く判断でき、本当に命拾いしました。

2度あることは3度あると申しますが、その3年後の2021年3月中旬にも発症し、再び6日間入院しました。原因は前立腺肥大症からくる急性前立腺炎（細菌感染）なので、根本治療としては前立腺の一部を切除する核出術を腹腔鏡下で行います。もうこれ以上繰り返すのは勘弁してほしいので、9月に手術を行って頂くよう主治医にお願いしました。そうしましたら1か月後の4月にも発熱があり、この時は幸いにも入院には至りませんでした。まるで天の声が手術を急かしているような気がして、9月の手術を6月に前倒して頂きました。手術の予定を1か月後に控えた5月にこれでもかとダメ押しで発熱しましたが、予定通り6月に手術を行い6日間入院しました。その後7～9月にCOVID-19の感染拡大第5波がありましたので、前倒ししなければ9月の手術の予定が延びたかもしれません。手術後はさすがに体力が落ちましたが、徐々に回復しテニスの公式戦に復活も果たしました。手術後は発熱することはなくなり、さらに、切除した前立腺の検体を病理検査した結果癌細胞が見つかり、これまで高かった前立腺腫瘍マーカーの値が切除後は正常値に下がった事実を振り返りますと、一連の経緯は「早く切れ」という天の声だったのかも知れません。

現在は、毎週末にインドアテニススクールで90分間のグループレッスンを受け、月に1回程度はアウトドアで2時間、コーチのプライベートレッスンも受けています。JOPの公認大会以外にも、練習相手を募集するテニスオフというネット掲示板を利用して、月に3～4回はシングルスやダブルスの練習試合を行っています。JOPの公認大会では、これまでに高知県、福岡県、愛知県、茨城県に遠征しました。ふくらはぎや太ももが以前よりも2サイズくらいサイズアップし、足腰や体幹が頑丈になりました。筋肉ポンプの機能が高まり、冬場に手足の先端が冷たくなる冷え性も改善されました。健康面では良いこと尽くめなのですが、本格的な競技テニスの道に入ると、身体のあちこちに故障が付き物になるのが玉に瑕です。力を入れ過ぎたサービスを連発して肩が上がらなくなることを始め、右肘のテニスエルボーで箸やコップが持てないことも以前にはありました。試合で激しく闘った後に膝や腰の痛みが長引くこともあります。どれもこれも、40代までは運動不足の中年だった自分には考えられない身体の変化で、新たな経験ばかりです。ありがたいことに9月には初孫の顔を見ることもできました。還暦も過ぎ、思えば遠くへ来たものです。過労で身体を壊すこともなく、また、いろいろな偶然にも恵まれて大事な宝物—健康な心身を手に入れることができましたのは、決して負け惜しみではなく、人生の途中で足を滑らせ迷走したお陰であると感謝しています。今後も、心と身体のケアを十分に行いながら、家族と共に末長く健康に暮らしていけて、可能な限り競技テニスを続けられたら有難いと思っています。

最後になりますが、この度「自撮りヒューマンドキュメンタリ」のコーナーを新たに設けて頂き、このような連載を行う機会を与えて下さいましたSRIDジャーナル編集委員会に対しまして、深く心より感謝を申し上げます。また重ね重ね、恥を忍んでの執筆と連載ではございましたが、もしも拙文が何かのお役に立つことがございましたら、筆者といたしましてはこれに増す喜びはございません。

文献リスト

1. Kazumi Yamaoka, 2010 年
Policies and strategies on irrigation charging systems for rice paddies in Japan and the Asian monsoon region
Workshop of ICID/TF-FIN on "Country policies and strategies on financing and implementation of current water user charging systems in irrigation" on 12 October 2010 in Yogyakarta, Indonesia : 1-17
2. 岡島賢治, 杉浦未希子, 山岡和純, 飯田俊彰, 2011 年
次世代教育としての大学生による小学生への環境教育
農業農村工学会誌「水土の知」, 第 79 巻 1 号 : 3-6
3. Kazumi Yamaoka and Yusuke Yamamoto, 2011 年
Policy proposal on water management systems in terminal canals for paddy fields in Indonesia – Lessons from experiences in Asian monsoon region and Japan
GOI/ADB/OECD INTERNATIONAL WORKSHOP: Sustainable Water Management for Food Security: An international policy dialogue on progressing water policy reform in agriculture, with focus on Indonesia, Bogor, Indonesia, 13-15 December 2011 : 1-17
4. 山岡和純, 2011 年 a
気候変動が農業と食料へ及ぼす影響 ジュニア地球白書
ワールドウォッチジャパン (東京都新宿区) : 25-51
5. 山岡和純, 2011 年 b
世界に発信: 水土里の共生社会基盤形成
愛知県立大学地域連携センター年報, 第 4 号 : 33-35
6. 山岡和純, 2011 年 c
圃場整備の効果
棚田学会誌, 第 10 号 : p.14
7. 山岡和純, 2011 年 d
論文紹介 Yoko Kijima, Keijiro Otsuka and Dick Sserunkuuma, Jan. 2011, "An Inquiry into Constraints on a Green Revolution in Sub-Saharan Africa: The Case of NERICA Rice in Uganda"; *World Development*, Volume 39, Issue 1, PP77-86
国際開発研究者協会 SRID ジャーナル (電子版), 第 1 号 : 1-2
8. 山岡和純, 2012 年 a
サブサハラ・アフリカ稲作水管理研究の意義および現状と課題,
農業農村工学会誌「水土の知」, 第 80 巻 8 号 : 7-10
9. 山岡和純, 2012 年 b
参加型灌漑開発管理の成果と課題～水問題解決への重点課題
環境技術, 第 41 巻 10 号 : 14-20
10. 山岡和純, 2012 年 c
世界の食糧問題の展望
国際開発研究者協会 SRID ジャーナル (電子版), 第 2 号 : 1-13
11. 山岡和純, 小山修, 2012 年
フード&ウォーターセキュリティー未来世代を養う食料と水の展望 地球環境データブック
ワールドウォッチジャパン (東京都新宿区) : 147-213
12. 山岡和純, 2012 年 d
地球規模課題国際研究ネットワーク事業 (国際研究ネットワーク形成等の推進) 調査報告
平成 23 年度農林水産省受託地球規模課題国際研究ネットワーク事業 (国際研究ネットワーク形成等の推進) 報告書 : 1-177
13. 山岡和純, 2012 年 e
世界の農業用水
(独)国際農林水産業研究センター「JIRCAS NEWS」, 第 63 号 : 4-5
14. Kazumi Yamaoka, 2012 年 a
Water for agriculture in the world
(独)国際農林水産業研究センター「JIRCAS Newsletter」, No.63 : 3-5
15. 山岡和純, 2012 年 f
TICAD、CARD、CAADP (アフリカ農業・農村開発フレームワーク)
農業農村工学会誌「水土の知」: 第 80 巻 8 号 : p.48
16. Kazumi Yamaoka, 2012 年 b
Policies and strategies on irrigation charging systems for rice paddies in Japan and the Asian monsoon region – with a case study

- Collection of Theses of Task Force on Financing Water for Agriculture (TF-FIN) of the International Commission on Irrigation and Drainage (ICID), 26 June 2012, Adelaide, Australia : 1-22
17. 山岡和純, 2013 年 a
TICAD V で明るみに出たサブサハラアフリカ農業開発の諸課題
国際開発研究者協会 SRID ジャーナル (電子版), 第 5 号 : 1-19
 18. 山岡和純, 2013 年 b
佐渡及び能登地区に見る世界農業遺産の価値観—世界農業遺産国際会議への期待
棚田学会誌「日本の原風景・棚田」, 第 14 号 : 77-85
 19. Kazumi Yamaoka, 2013 年 a
Institutional design of irrigation and rural development projects and management in Japan
Seminar on ""Synergies and Symbiotic Strategies in Irrigation -Lessons learnt from Japanese experiences-"" , Jakarta, Indonesia, 20 February 2013 : 1-17
 20. Kazumi Yamaoka, 2013 年 b
Synergy effects of investment of farmers and governments on irrigation commons for sustainable management
Proceedings of the 14th Global Conference of the International Association for the Study of the Commons, Fuji-Yoshida, Japan, 7 June 2013 : 1-23 (CD 版)
 21. Kazumi Yamaoka, 2013 年 c
Development trend of the world's irrigated agriculture and its challenges to sustainable investment
Collection of Theses of The 1st World Irrigation Forum, Mardin, Turkey, 29 September-3 October 2013 : 1-12
 22. 山岡和純, 2013 年 c
世界農業遺産—その現状と取り組みの意義
全国棚田連絡協議会「ライステラス」, 第 64 号 : p.12
 23. 山岡和純, 2013 年 d
巻頭言—世界水会議と灌漑排水
日本 ICID 協会会報, 第 28 号 : 1-2
 24. 山岡和純, 2013 年 e
CARD イニシアティブと TICAD
(独)国際農林水産業研究センター「JIRCAS NEWS」, 第 68 号 : p.6
 25. 山岡和純, 2013 年 f
農業用水と水資源のネットワーク—世界水フォーラムと ICID
(独)国際農林水産業研究センター「JIRCAS NEWS」, 第 68 号 : p.8
 26. Kazumi Yamaoka, 2013 年 d
TICAD and CARD initiatives – Linkage between research and African development
(独)国際農林水産業研究センター「JIRCAS Newsletter」, No.68 : p.5
 27. Kazumi Yamaoka, 2013 年 e
Network on irrigation and water resources – WWC/WWF and ICID
(独)国際農林水産業研究センター「JIRCAS Newsletter」, No.68 : p.7
 28. 山岡和純, 2014 年 a
3-3-8. 海外展開の可能性についての調査
戦略的創造研究推進事業 (社会技術研究開発) 問題解決型サービス科学研究開発プログラム研究開発プロジェクト「農業水利サービスの定量的評価と需要主導型提供手法の開発」研究開発実施終了報告書 : 83-87
 29. Kazumi Yamaoka, 2014 年 a
World Water System Heritage (WWaSH) Program
ICID NEWS, 2014, (3) : 4-5
 30. 山岡和純, 2014 年 b
パネルディスカッション「アジアへの貢献を通じた日本の競争力の向上」
(独)国際農林水産業研究センター「JIRCAS NEWS」, 第 70 号 : p.12
 31. Kazumi Yamaoka, 2014 年 b
Panel discussion: Strengthening Japanese agricultural competitiveness through collaboration with Asia
(独)国際農林水産業研究センター「JIRCAS Newsletter」, No.70 : p.11
 32. Avinash Chand Tyagi and Kazumi Yamaoka, 2015 年
Development of the WWC world water heritage systems (WHS) program
Water & Heritage (ISBN: 978-90-8890-278-9) : 417-429

33. 山岡和純, 2015 年 a
訪問した 14 か国
国際開発研究者協会 SRID ジャーナル (電子版), 第 8 号 : 1-9
34. 山岡和純, 2015 年 b
持続可能な未来を育み発展させる
地球白書 2012-13 (翻訳担当 : 第 13 章、書籍原題"State of the World 2012") : 249-263
35. 山岡和純, 2015 年 c
WWC と世界の水議論～開発協力～SDGs の動向
日本水土総合研究所「海外情報誌 ARDEC」: 第 52 号 : 29-33
36. 山岡和純, 2015 年 d
国際農業研究協議グループ (CGIAR)
農業農村工学会誌「水土の知」: 第 83 巻 1 号 : p.56
37. 山岡和純, 2015 年 e
第 7 回世界水フォーラム (WWF7) : 世界の水議論の行方
国際開発研究者協会 SRID ジャーナル (電子版), 第 9 号 : 1-10
38. 山岡和純, 2015 年 f
第 7 回世界水フォーラムにおける水をめぐる国際的な潮流
(独)国際農林水産業研究センター「JIRCAS NEWS」, 第 75 号 : 4-5
39. Kazumi Yamaoka, 2015 年
International Movement on Water at the 7th World Water Forum
(独)国際農林水産業研究センター「JIRCAS Newsletter」, No.75 : 3-4
40. 山岡和純, 2015 年 g
アフリカで人気急上昇、でも、日本とは違うおコメの事情
国際開発研究者協会 SRID Newsletter, 第 467 号 : 3-5
41. Kazumi Yamaoka and Gabriel Owusu, 2016 年
Developing Multi-functional Farmer Based Organizations for Systematic Extension Services in Ghana
Proceedings of the 4th African Regional Conference on Irrigation and Drainage (ARCID) : 1-11 (CD 版)
42. 山岡和純, 2017 年 a
SALIBU 農法 — 貧しい小農たちへの第二の「緑の革命」 —
日本水土総合研究所「海外情報誌 ARDEC」: 第 57 号 : 40-44
43. Kazumi Yamaoka, Khin, Mar Htay, Erdiman and Resfa, Fitri Amir, 2017 年
Increasing Water Productivity through Applying Tropical Perennial Rice Cropping System (SALIBU Technology) in CDZ, Myanmar
The 23rd International Congress on Irrigation and Drainage, 8-14 October 2017, Mexico City, Mexico “Modernizing Irrigation and Drainage for a New Green Revolution” (in USB flash drive) : 1-15
44. 山岡和純, 2017 年 b
持続可能な開発目標 (SDGs)
農業農村工学会誌「水土の知」, 第 85 巻 2 号 : p.76
45. 山岡和純, 2018 年 a
SALIBU : 薬 (ひこばえ) で目指す第二の「緑の革命」
国際開発研究者協会 SRID ジャーナル (電子版), 第 15 号 : 1-12
46. 山岡和純, 2018 年 b
世界農業遺産と灌漑・水遺産
日本水土総合研究所「海外情報誌 ARDEC」: 第 59 号 : 31-35
47. Kazumi Yamaoka, Khin, Mar Htay, Erdiman, Resfa, Fitri and Joseph Ofori, 2018 年
Applying Tropical Perennial Rice Farming Systems (SALIBU Technology) and Increasing Water Productivity in Myanmar and Ghana
PAWEES-INWEPF International Conference 2018 in Nara, 20-22 November 2018 : 1-12
48. 山岡和純, 2018 年 c
書評 : 浅沼信爾・小浜裕久共著『ODA の終焉 機能主義的開発援助の勧め』
日本水土総合研究所「海外情報誌 ARDEC」: 第 58 号 : 44-46
49. Resfa, Fitri, Erdiman, Nunung Kusnadi and Kazumi Yamaoka, 2019 年
Salibu Technology in Indonesia: An Alternative for Efficient Use of Agricultural Resources to Achieve Sustainable Food Security
Paddy and Water Environment, 第 17 巻 3 号 : 403-410
50. Kazumi Yamaoka and Joseph Ofori, 2019 年 a

- New strategy to drastically increase water productivity through high yielding perennial rice ratooning in Ghana
 Proceedings for the Third World Irrigation Forum, Bali, Indonesia, 2-4 September, 2019 : 1-10
51. Kazumi Yamaoka, Khin Mar Htay, Resfa Fitri and Erdiman, 2019 年 b
 Revolutionarily increasing water productivity and saving energy by high yield rice ratooning (SALIBU technology) in Myanmar
 Proceedings for the Third World Irrigation Forum, Bali, Indonesia, 2-4 September, 2019 : 1-9
52. 山岡和純, 2019 年
 書評: 藤井一至著『土 地球最後のナゾー100億人を養う土壌を求めて』
 日本水土総合研究所「海外情報誌 ARDEC」: 第 61 号 : 44-45
53. Kazumi Yamaoka and Joseph Ofori, 2020 年
 Changing the Nervous Mind of Small-scale Farmers Who Are Reluctant to Invest for Their Development
 Irrigation and Drainage, Special Issue (in printing) : 1-16
54. 山岡和純, 2020 年 a
 新型コロナウイルスがくれた新たな「気づき」
 国際開発研究者協会 SRID ジャーナル (電子版), 第 19 号 : 1-11
55. 山岡和純, 2020 年 b
 書評「ミクロの寄生、マクロの寄生」
 “マクニール, ウィリアム・H、2007 年、疫病と世界史 (上・下)、中央公論新社、佐々木昭夫訳
 Plagues and peoples / William H. McNeill, Garden City, N.Y. : Anchor Press , 1976 “
 国際開発研究者協会 SRID ジャーナル (電子版), 第 19 号 : 1-3
56. 山岡和純, 2021 年 a
 自撮りヒューマンドキュメンタリ「山岡和純 : 第 1 部 - 文理両刀使い仕事人の誕生・30 代まで」
 国際開発研究者協会 SRID ジャーナル (電子版), 第 20 号 : 1-16
57. 山岡和純, 2021 年 b
 自撮りヒューマンドキュメンタリ「山岡和純 : 第 2 部 : 行政官から教育・研究者へ」
 国際開発研究者協会 SRID ジャーナル (電子版), 第 21 号 : 1-19
58. JIRCAS, 2021 年
 Policy Recommendations on Economic Development of Smallholder Rice Farmers in Ghana through Multifunctional Farmer Based Organization and Highly Profitable Crop Cultivation Technology, i.e. SALIBU Rice Ratooning
 Japan International Research Center for Agricultural Sciences (JIRCAS), 68P
59. 山岡和純, 2022 年 a
 脱炭素化と国際開発協力
 国際開発研究者協会 SRID ジャーナル (電子版), 第 22 号 : 1-16
60. 山岡和純, 2022 年 b
 自撮りヒューマンドキュメンタリ「山岡和純 : 第 3 部 : 思えば遠くへ来たもんだ、この先どこまで行くのやら」
 国際開発研究者協会 SRID ジャーナル (電子版), 第 22 号 : 1-24